

家庭学習を活かした算数科の授業づくりに関する研究 —「奈良の学習法」を取り入れた実践事例を通して—

教育実践高度化専攻
小学校教員養成特別コース
P10059A
小林翔子

1. 問題の所在と研究の目的

近年、学力や読解力、学習意欲の低下が言われており、現行の学習指導要領（文部科学省、2008）においても「家庭での学習時間などの学習意欲、学習習慣・生活習慣に課題」と述べている。

筆者自身も実地研究Ⅰ、Ⅱの中で児童（3年生26名）の実態を観察することによって、家庭学習を問題意識として取り上げるようになった。算数の授業中に活発に発言する児童が多い一方で、中にはなかなか発言できない児童や授業中に理解することが出来ず、学習意欲が低い児童もいた。そこで、筆者は家庭学習に問題があるのではないかと感じ、家庭学習についてのアンケートを行った。事前と事後のアンケートを比較すると、「算数は好きか」という項目に対しては、好きと答えた児童が11%増加したが、「復習プリントを行うことにより授業が分かりやすくなったか」という項目については約6割の児童は変わらないと回答した。

この実践を考察した結果、児童が授業をもっと理解しやすくなるためには復習だけではなく、予習も必要であるのではないかと仮説を立てた。問題意識としては以下の2点である。

- ・学習意欲の向上を目指すこと
- ・家庭学習を取り入れた算数科授業の実践

この問題意識をもとに研究を進めていると、予習を取り入れて授業を行っている公立小学校を知り、さらにそれは奈良女子大学附属小学校で行われている「奈良の学習法」を参考にしていると知った。以上のことを踏まえ、本研究の目的としては、「奈良の学習法」を分析することによって、予習を取り入れた授業の公立小学校・算数科での実践可能性を考慮することとする。

2. 研究報告書の構成

本研究の目的

第1章 予習の意義と効果

第2章 「奈良の学習法」とは

第3章 公立小学校の実践研究の考察

第4章 予習を取り入れた実践計画の立案・考察

本研究の成果と今後の課題

3. 研究の成果

本研究の成果は、以下の通りである。

本研究の目的では、本研究の問題意識と目的について述べた。

第1章では、予習の意義と効果に関する先行研究を概観し、本研究における予習の意義と効果の捉え方を示した。市川（2004）の先行研究によると、授業の見通しや疑問点などを授業の前に整理することによって、「生分かり状態」を生む。そのことにより、初見よりも授業の理解が深まり自己効力感や学習意欲が向上する児童の姿が、予習の意義として挙げられている。

これらとともに、永井（2010）・岡田（2007）らの先行研究から、本研究では予習の効果については以下のように捉えた。

- ①授業の見通しを持つことによって、「知識・理解」の観点で効果が期待できる。
- ②事前に把握した疑問点を授業で活かすことによって、学習内容を焦点化することができる。
- ③成功経験を増加させることにより、個人的自己効力感や競争的自己効力感を高める。

第2章では、「奈良の学習法」に関して、蜂須賀氏の研究を中心に概観し、本研究の「奈良の学習法」の捉え方を示した。蜂須賀（2011）は日和佐氏（奈良女子大学附属小学校主幹教諭）が算数科を以下の2つの型に分けて指導していると述べている。1つ目は算数研究であり、「おもしろいな、ふしぎだなあ。」という感性を耕し、興味・関心をもって子ども自ら算数的内容を追求していく学習である。2つ目は教科書算数であり、「きっちり分かる、きっちりできる。」を目的とし、文化遺産としての算数を子ども自ら習得していく学習である。本研究では、「奈良の学習法」の中でも「自律的な学習・学校でのひとり学び・教科書算数」を公立小学校で取り入れるべきことと定義した。

また、教科書算数を実践している太田氏（同志社小学校教諭）の授業を観察・考察を行った。

第3章では、筆者が公立小学校教師A（勤続17年）を対象に行った「奈良の学習法」に関するインタビューと、公立小学校教師Bを対象に行った

授業観察の概要について述べた。観察の対象とした授業について、表 3-1 に示す。

表 3-1 授業観察の対象

指導者	予習を取り入れた授業を実践している教師 B (勤続 20 年)
対象学級	公立小学校 第 6 学年 1 学級
対象授業	「比例と反比例」 (第 6 時/全 16 時間)

また、教師 A と教師 B の予習を取り入れた授業に関するインタビューの結果と考察についても述べた。インタビューと観察授業の考察を以下の 3 点にまとめた。

- ①教師の予習の工夫としては、予習の評価規準を明確化、日々の教師の様々な取り組み（朱書きや授業中など）が挙げられる。また、授業をパターン化することで予習を行いやすくする。
- ②予習は、問題文を写し・解き方やおたずね・課題（今日めあて）を書き、教師が予習を形成的に評価する。
- ③児童にとっての予習の良いところは、目的意識を持つことにより、学習の構えを作ることである。

第 4 章では、筆者が考える予習を取り入れた授業の概要を提案した後に、筆者が実地研究Ⅱで行った授業の概要を紹介した。次に、実践授業の考察を述べ、それをもとに予習を取り入れた実践計画の立案を行った。

まず、1 年間の教師の取り組みについて提案し考察を行った。筆者が考えた 1 年間の予習の取り組みに関する計画（3 学期制）について、表 4-1 に示す。

表 4-1 1 年間の予習の取り組みに関する計画

月	教師の工夫
4 月	・予習についてのガイダンス ・「予習タイム」の活用 ・宿題として予習 ・予習プリントの活用 ・保護者への説明
5 月（下旬）	・ノートを活用
6 月	・予習についてのアンケート
7 月	・1 学期の振り返り
9 月～11 月	・算数係を司会 ・自律的な学習の指導
12 月	・2 学期の振り返り
1 月～2 月	・9 月～11 月と同じく指導 ・数学的な見方・考え方を重視する学習の指導

3 月	・1 年間の振り返り
-----	------------

また、筆者は授業を立案するために「予習の長所・短所・留意点」を整理した。「予習の長所・短所・留意点」は、表 4-2 に示す。

表 4-2 予習を取り入れた授業についての特徴

概要	児童	教師
①長所	・学習の構えづくり ・家庭との連携 ・自主的な学習 ・学力・学習意欲の向上	・児童の理解度の把握 ・授業で活用することにより、授業内容を焦点化
②短所	・学習意欲の差	・予習ノートを見る時間の確保
③留意点	・継続的な取り組み	

最後に実践授業の考察を述べ、それをもとに予習を取り入れた算数科授業の立案を行った。なお、小学校第 3 学年の児童を対象とし、分数の単元で立案を行った。実践授業では、「児童の学習内容理解の把握不足・過度の教師主導の授業」という課題が見つかり、それらも考慮して授業の立案を行った。

「本研究の成果と今後の課題」では、本研究で明らかになったことをまとめるとともに、今後の課題を示した。

4. 今後の課題

本研究の課題は、以下の 2 点である。

- I 筆者が予習を取り入れた授業の実践・検証をすることに至らなかった。
- II 授業実践を行うにあたって更なる留意事項を見つけ出す。

今後は、本研究で立案した実践計画を実行することで、予習を取り入れた授業の検証・考察・改善を行うことができると考える。さらに、授業実践を行うことにより、児童からの予習を取り入れた授業の見方も考察することができると考える。

また、本研究では経験豊かな熟達教師を分析の対象としたため、筆者が実践するときにはさらなる留意事項が見つかり、予習を取り入れた授業の実践の概要をより詳しく紹介できるのではないかと考える。

修学指導教員 加藤 久恵
指導教員 加藤 久恵